

## 「安息日の癒し」

マルコの福音書 3:1~5

### はじめに

前回と同様に、今日の箇所も「安息日」に起こった一つの出来事が記されています。ヘブル語でシャバット(שַׁבָּת)と呼ばれるこの日は本来、創世記 1~2 章に記された、神の天地創造の御業の完成を指し示すものです。

【新改訳 2017】

#### 創世記

2:1 こうして天と地とその万象が完成した。

2:2 神は第七日に、なさっていたわざを完成し、第七日に、なさっていたすべてのわざをやめられた。

2:3 神は第七日を祝福し、この日を聖なるものとされた。その日に神が、なさっていたすべての創造のわざをやめられたからである。

神は「なさっていたわざを完成」させ、そして「すべてのわざをやめられた。」とあります。ここに使われている「休む、やめる」という意味の動詞シャヴアト(שָׁוַת)にこの「安息日」シャバットは由来しています。このように「安息日」とは神の御業、ご計画の「完成」を指し示す日であると言えます。しかしイスラエルの民、ユダヤ人たちはこの本質よりも以下の律法に注目しました。

【新改訳 2017】

#### 出エジプト記

20:8 **安息日**を覚えて、これを聖なるものとせよ。

20:9 六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。

20:10 七日目は、あなたの神、【主】の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。

この律法は彼らの歴史の中で複雑化し、イエシュアのおられた時代では安息日に物を持ち運ぶことや、長い距離を移動すること（900m 以上）も禁じられていました。もはや安息日は、神のご計画を想起させるものではなく、単に人を縛る呪いのようなものになっていたのです。そのような時代背景が今日の箇所に記された出来事にあることを覚えながら、そこに表されている神のご計画を探し求めてまいりましょう。

### 1. 再び会堂に

【新改訳 2017】

#### マルコの福音書

3:1 イエスは再び会堂に入られた。そこに片手の萎えた人がいた。

イエシュアは「**再び**」会堂に入られたとあります。ここにシューヴ(שוב)「帰る、戻す」というヘブル語が使われており、イエシュアは「会堂に帰られた、戻られた」とも訳すことができます。そしてこのシューヴは創世記 3:19 にその最初の言及があり、本来取られたところに帰る、全く最初に戻す、という状態を指し示す言葉であると考えられます。

【新改訳 2017】

創世記

3:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に**帰る**。あなたはそこから取られたのだから。あなたは土のちりだから、土のちりに**帰る**のだ。」

これは罪を犯したアダムに対して神が語られた御言葉で、死を意味するものとも捉えられますが、ここでは神は一切「死」ヘブル語でムート(מות)という言葉を使っておられません。「死」は終わりという意味合いが強い言葉ですが、「帰る、戻す」という意味のシューヴは**再生、最初から新しくやり直すこと**が強調されて指し示された言葉であると考えられます。また「**会堂**」ベート・ハクネーセト(בית תהנות)は、「家、国」を意味するバイト(בית)と、「集める」という意味の動詞カーナス(קנאס)の名詞形、この二つの単語からなる言葉です。つまり「**イエスは再び会堂に入られた。**」という記述には、**イエシュアが神の家、御国に、その国民となる人々を集め、全く新しく造り変えられること**が表されていると考えられます。そしてこれこそが「**安息日**」が指し示す神のご計画の完成であることがここに表されていると考えられます。

そして「**そこに片手の萎えた人がいた。**」とあります。この存在は一体何を表しているのでしょうか。ヘブル語で「**手**」はヤード(יד)と言い、本来は人がいのちの木の「**手**」を伸ばしてその実を食べることを指し示した言葉で(創世記 3:22)、人が永遠のいのちを得ることを指し示した言葉であると考えられます。またその手が「**萎えた**」人という箇所にはヤーヴェーシュ(צב)「枯れる、しなびる」という意味の動詞が使われています。その最初の言及は創世記 8:7 です。

【新改訳 2017】

創世記

8:6 四十日の終わりに、ノアは自分の造った箱舟の窓を開き、  
8:7 鳥を放った。すると鳥は、水が地の上から**乾く**まで、出たり戻ったりした。

これはノアの箱舟の物語の一場面ですが、地表の全面を水没させた大洪水が、やがて終息していく際にノアは一羽の鳥を箱舟から解き放ちます。「**すると鳥は、水が地の上から乾くまで、出たり戻ったりした。**」とあります。この「**乾く**」が聖書で最初のヤーヴェーシュです。そしてそれは鳥が「**出たり戻ったりした。**」という出来事を指し示しており、この箇所にも先ほどのシューヴが使われています。つまりこの「**片手の萎えた人**」とは、**新しく造り変えられる人が永遠のいのちを手にする**ことを指し示している

と考えられ、先ほどの「イエスは再び会堂に入られた。」という記述が指し示している内容と並行し、それを補足説明するような形で表されていると考えられます。

このように「イエスは再び会堂に入られた。そこに片手の萎えた人がいた。」という記述には、イエシュアが神の国、御国を建てられることと、その国民となる人々を全く新しく造り変えられること、そしてその国民は永遠のいのちを手にするを指し示していると考えられます。

## 2. 待ち伏せる

【新改訳 2017】

マルコの福音書

3:2 人々は、イエスがこの人を安息日に治すかどうか、じっと見ていた。イエスを訴えるためであった。

この箇所は私たち異邦人にはなかなか理解しにくいものがあります。イエシュアがこの「片手の萎えた人」を癒すとイエシュアを訴える口実になる、つまりイエシュアに汚名を着せ、犯罪者として仕立て上げることができるというのです。それは律法に記された以下の内容によるものでした。

【新改訳 2017】

出エジプト記

20:8 **安息日**を覚えて、これを聖なるものとせよ。

20:9 六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。

20:10 七日目は、あなたの神、【主】の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。

「あなたはいかなる仕事もしてはならない。」つまりイエシュアが癒しのわざを行えばそれは「**仕事**」をしたと見なされ、安息日に対する冒涇として律法に違反したことになるというのです。

「人々は、…治すかどうか、じっと見ていた。」とありますが、ここに「待ち伏せる」という意味の動詞アーラヴ(אָרַב)が使われています。

【新改訳 2017】

申命記

19:11 しかし、もし人が自分の隣人を憎み、待ち伏せして襲いかかり、彼を打って死なせ、これらの町の一つに逃れるようなことがあれば、

19:12 彼の町の長老たちは人を遣わして彼をそこから引き出し、血の復讐をする者の手に渡さなければならない。彼は死ななければならない。

これは殺人の罪に関する律法の一文ですが、殺人を犯した者に殺意があったかどうかを裁きの基準となりました。そしてこの「隣人を憎み、待ち伏せして襲いかかり」という、殺意のあった殺人についての箇所に聖書で最初のアーラヴがあります。ですからアーラヴは本来、殺意の具体的な現れを指し示す言

葉として記されています。つまりこの時点においてすでに人々はイエシュアに対して殺意を抱いていたと考えられます。そんな人々を目の前に、イエシュアは「片手の萎えた人」に次のように言われます。

### 3. 真ん中に立つ

【新改訳 2017】

マルコの福音書

3:3 イエスは、片手の萎えたその人に言われた。「真ん中に立ちなさい。」

「真ん中に立ちなさい。」ここには三つのヘブル語が使われています。一つは「起きる、立ち上がる」という意味の動詞クーム(קוּם)。この言葉は創世記 4:8 に最初の言及があり、アダムの息子カインがその弟であるアベルを襲い、そして殺した行為を指し示しており、**神に目を留められた者、選ばれた者を殺す**ということがクーム本来の持つ意味であると考えられます。次に二つ目は「立つ、耐える」という意味の動詞アーマド(אָמַד)です。これは創世記 18:8 に最初の言及があり、アブラハムが旅人を客としてもてなすように神を迎え、その食卓で給仕をしたことを指しており、本来**神に仕え、また交わることを**指し示した言葉であると考えられます。そして「真ん中」を意味する三つ目の言葉ターヴェク(תָּוַעַק)、この最初の言及は創世記 1:6 です。

【新改訳 2017】

創世記

1:6 神は仰せられた。「大空よ、水の**真ただ中**にあれ。水と水の間を分けるものとなれ。」

1:7 神は大空を造り、大空の下にある水と大空の上にある水を分けられた。すると、そのようになった。

これは神の天地創造の御業の第二日、出来事としてはこの地球の水が雲のような大気中の蒸気と、海や川のような状態に分けられたことを表しています。ですからターヴェクには本来、上と下に「分ける」という意味があると考えられ、**区別する、判別する、すなわち裁き、統治する存在**を指し示すと考えられます。イエシュアの言われた「真ん中に立ちなさい。」という御言葉の中に用いられた、クーム、アーマド、そしてターヴェク、これら三つの言葉が本来指し示す意味を統合するならば、そこにはアブラハムの子孫であるイスラエルの民、ユダヤ人たちの存在が表されていると考えられます。彼らはイエシュアを十字架にかけて殺す存在ですが、神の所有の民として選ばれたアブラハムの子孫であり、神の国において全ての国々の民を祝福するその基となる、まさに中心となる存在だからです。「イエスは、片手の萎えたその人に言われた。「真ん中に立ちなさい。」というこの記述は、イスラエルの民に対する神のご計画を表したものであると考えられます。

### 4. 黙っていた

【新改訳 2017】

マルコの福音書

3:4 それから彼らに言われた。「安息日に律法にかなっているのは、善を行うことですか、それとも悪を行うことですか。いのちを救うことですか、それとも殺すことですか。」彼らは黙っていた。

イエシュアの問いかけに対して「**彼らは黙っていた。**」とあります。ここにはハーラシュ(שָׁרַח)「彫り込む、細工する、黙っている」という意味の動詞が使われています。

【新改訳 2017】

創世記

4:22 一方、ツイラはトバル・カインを産んだ。彼は青銅と鉄のあらゆる道具を造る者であった。トバル・カインの妹はナアマであった。

これはアダムの子カインの子孫であるトバル・カインについての記述です。「彼は青銅と鉄のあらゆる道具を造る者であった。」という箇所には聖書で最初のハーラシュが使われています。鉄や青銅は道具として作られる際、燃える炉の中で溶かされ、また打ち叩かれ、鍛えられて作られます。「**黙っていた。**」と訳されたハーラシュですが、本来は道具として作られるという意味があるのです。ここにもイスラエルの民に対する神のご計画が表されていると考えられます。すなわち神の所有の民、まさに神の「道具」として選ばれた彼らでしたが、「**律法にかなっている**」こと、「**善を行うこと**」と「**悪を行うこと**」また「**救うこと**」と「**殺すこと**」の正しい理解がその心にハーラシュ、彫り込まれ、刻みこまれるために、**燃える炉のような、また打ち叩かれるような苦難や痛みの中を通らされる**ことが、彼らに対しての神のご計画であることがここに表されているということです。事実、旧約聖書はイスラエルの苦難と戦いの歴史と呼べるものであり、また今日においても彼らは常に異邦人からの迫害と攻撃の対象となっています。しかしその苦しみの中から彼らを救い出し、イスラエルの民を神の所有の民として「**元どおりに**」されるイエシュアの姿が次に示されています。

## 5. 手を伸ばす

【新改訳 2017】

マルコの福音書

3:5 イエスは怒って彼らを見回し、その心の頑なさを嘆き悲しみながら、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。彼が手を伸ばすと、手は元どおりになった。

イエシュアは彼らを「**見回し**」たとあります。ここに使われているヘブル語はナーヴァト「目を留める」という意味の動詞で創世記 15:5 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】

創世記

15:5 そして主は、彼を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」

15:6 アブラムは【主】を信じた。それで、それが彼の義と認められた。

これは神がアブラムとその子孫に約束されたそのご計画を示したものです。ここで「見上げなさい」と訳されているのが聖書で最初のナーヴァトです。そしてそれは天の星のように多くの民となる彼の子孫、イスラエルの民を指し示しています。イエシュアは彼らの「その心の頑なさを嘆き悲しみながら」も、その目は神がアブラムに約束された、イスラエルの民に対する神のご計画を見つめておられたことがここに表されていると考えられます。

そしてイエシュアは「手を伸ばしなさい」と言われました。ここにパーシャト(טושף)「脱ぐ、突撃する」という意味の動詞が使われています。最初の言及は創世記 37:23 です。

【新改訳 2017】

創世記

37:23 ヨセフが兄たちのところに来たとき、彼らは、ヨセフの長服、彼が着ていたあや織りの長服をはぎ取り、

これはヤコブ（イスラエル）の12人の息子たちの出来事ですが、父ヤコブのヨセフに対する偏愛を妬み、またヨセフの見た夢の内容に怒った兄たちがヨセフにしたひどい仕打ちを描いた一場面です。ここで「長服をはぎ取り」と訳されているのが聖書で最初のパーシャトです。この「長服」は父の特別な愛情を示したものです。（創世記 37:3）つまりパーシャトには本来、父の特別な愛を取る、奪い返すという意味があると考えられます。そして「手」はヤード(יָד)と言い、永遠のいのちを得ることを指し示していると先に述べました。ですからイエシュアの言われたこの「手を伸ばしなさい」という御言葉には、イスラエルの民が父なる神に特別に愛される、神の選びの民としての地位を取り戻し、永遠のいのちが与えられるという神のご計画が指し示されていると考えられます。そしてまた「手は元どおりになった」という箇所には先に述べた、御国の民として造り変えられることを指し示したシューヴ(שׁוּב)が使われていることもまた注目すべき重要な点です。造り変えられることとはもちろん、私たちのこの肉体のことです。今のこの肉体はやがて朽ち果てて、神が命じられたとおりに土に帰っていきます。しかし新しく造り変えられた肉体は、永遠に生きておられる神が、本来ご自分と永遠に交わる存在として造られた、罪を犯す以前のアダムのような状態となるのです。この出来事が現実にかかるその時が神のご計画の完成であることを示すために、イエシュアは偶然でも気まぐれでもなく、あえてこの「安息日」にこの御業を成されたのだと考えられます。

このように、「安息日」とは神のご計画の完成を指し示す日です。そしてそのご計画が何であるか、どのような出来事であるかを理解し、これを覚え、信じて期待し、待ち望むこと、それはすなわち「まず神の国と神の義を求め（マタイ 6:33）」ことであり、それは他のどんな業よりも働きよりも尊ぶべきことであると信じます。そしてこのご計画を成し遂げられる御方はイエシュアであり、イエシュアの御言葉と御業によってのみそれが完成されるのであり、私たち人の力や知恵による働き、労働は必要とされません。ただイエシュア御一人がそれを成されるのです。それが「安息日」に一切の労働を禁じた律

法の真意であると考えられます。ですから神の国を求める者はみな、イエシュアを求めましょう。「主イエシュアよ、来てください。」と祈りましょう。御霊とともにありますように。